

## PC-316

### 徳島赤十字病院におけるエドキサバンの使用状況と適正使用への検討

徳島赤十字病院 薬剤部

○岡本 理奈、組橋 由記、鈴江 朋子

【目的】エドキサバンは2011年に開発された新規薬剤であり、当院での使用状況を確認するとともに、腎機能に対する投与量や副作用の発現状況を調査し、適正使用につなげる。

【方法】2013年4月1日から12月31日までにエドキサバンを投与開始した患者を対象とした。電子カルテで患者の背景（年齢、体重、腎機能、併用薬剤等）を把握し、投与量の適正や副作用発現状況を検討した。腎機能はeGFRとCockcroft-Gault式により算出したCLcrを用いた。

【結果】75歳以上の高齢者に投与されることが多く（68.0%）、75歳以上では75歳未満に比べ副作用発現率は9.5%上昇した。体重不明のためCLcrを求められない症例は13.3%を占めていた。また、eGFRは腎機能を良く評価したため過量投与となった症例が13.8%となった。このうち44.4%で副作用が発現していた。エドキサバン内服中に中止となる原因は出血傾向が最も多く、エドキサバン単独投与症例に比べ他の抗血栓薬併用投与症例での出血の副作用発現率は10.6%上昇した。

【考察】高齢者、低体重患者では副作用発現率が高くなるため、体重測定を促し、さらにCLcrを利用することで適正使用につなげることができると考えられる。抗血栓薬併用により出血傾向となるため、今後は併用薬確認を行い電子カルテ上に記載する等の情報提供を行い、投与中は薬剤師も服薬状況を把握し、出血傾向等の副作用の早期発見に努めていきたい。

## PC-318

### 当院における抗MRSA薬の使用状況とVCMのTDMの実施状況調査

浜松赤十字病院 薬剤部

○小林 美絵、村松 英彰、牧田 道明

【目的】当院では2010年3月から抗MRSA薬の届出制・許可制を開始し使用状況の調査を行っている。今回、届出制・許可制開始後の2011年から2013年までの使用状況の変化について報告する。また、当院ではTDMの血中濃度測定が外部委託であり、結果報告が最短で2日後という問題もあり、TDM実施の現状について調査した。

【方法】2011年1月から2013年12月までの抗MRSA薬の使用状況とVCMのTDMの実施状況を調査した。

【結果】・抗MRSA薬の使用状況

使用症例数は、2011年に比べ、2012、2013年は増加傾向にあった。使用薬剤は、VCMが78%を占めていた。また、80歳以上の高齢者が35%を占め、クレアチニンクリアランス50mL/分未満の患者（透析患者を含む）の割合は50%以上であった。投与2週間以上の長期使用患者の割合は、34%であった。

・VCMのTDM実施状況 2011年から2013年のTDMの実施率は78%であり、3年間で上昇傾向にあった。TDMが未実施の症例は、投与期間が7日以内の症例は71%、2週間以上の長期症例は14%であった。初回血中濃度測定は、投与3日目が多かった。

【考察】当院における抗MRSA薬の使用では、VCMが78%を占めていたので、有害事象の防止・治療効果の向上・耐性菌出現の抑制のためTDMの実施率の向上は重要であると思われる。過去3年間では、TDMの実施率は、上昇傾向にあった。反面、当院では血中濃度の測定結果の報告までに最短で2日間かかり、投与1週間以上の症例が対象となると考えられた。高齢者・腎機能障害患者を考慮した場合、初回投与計画、結果報告までの腎機能低下の確認、VCM以外の薬剤選択を提案していくことも重要と考えられる。

## PC-317

### ダプトマイシンの使用状況に関する検討

京都第二赤十字病院 薬剤部

○藤田 将輝、澤田 真嗣、岡橋 孝侍、藤田 敦夫、友金 幹視、三上 正

【目的】ダプトマイシン（以下、DAP）は抗菌活性の強さを背景に「MRSA感染症の治療ガイドライン」において、様々な疾患に対する第一選択薬として位置づけられ、幅広く使用されている。しかし、DAPの効果及び副作用についての報告例は多くない。そこで、京都第二赤十字病院（以下、当院）のDAPの使用状況を調査し、効果及び副作用について検討を行った。

【方法】2013年4月から2014年3月の期間に当院でMRSA菌血症に対してDAPによる治療を行った患者を調査対象とし、DAPの投与量、投与日数、MRSAが陰性化するまでの期間及び副作用の発現を調査した。副作用の判定は有害事象共通用語基準v4.0に基づいて行った。

【結果】調査症例は10例であり、投与量の中央値は6.3（5.4-10.7）mg/kg、投与日数の中央値は14.5（7-27）日であった。DAP使用により7例（70%）が陰性化し、その期間の中央値は8（5-33）日であった。3例がDAP不応例であり、そのうち2例はDAP使用後の再燃例であった。また副作用が発現した症例は3例であり、Grade2（最小限/局所的/非侵襲的治療を要する）以上の副作用を発現した症例は0例であった。

【考察】DAPは代表的な副作用としてCPK上昇等が報告されているが、今回の結果から比較的 safely に使用できると考える。また、既存の報告に比べ陰性化までの期間が長期であることは、検査のタイミング等の影響が考えられる。しかし、DAP使用後に再燃した症例ではDAP不応例もあり、治療が難渋する傾向が示唆された。そのため今後更に検討を行い、薬剤師が投与量設定及び副作用のモニタリングに対して積極的に関与することでDAPの適正使用に貢献できると考える。

## PC-319

### 小児におけるバンコマイシン注（VCM）の体内動態に影響する要因の検討

熊本赤十字病院 薬剤部

○浦田 由紀乃、平田 憲史郎、陣上 祥子

【目的】VCMを小児に使用する際、熊本赤十字病院（以下当院）では、年齢、病態に応じて1回10～15mg/kg、6～8時間毎の投与量で開始し、TDMにより用量調節を行っている。しかし、血中濃度が目標域まで到達せず、大幅な増量を要する例が少なくない。そこで小児におけるVCM初期投与指針を作成することを目的として、TDMの現状と、体内動態に影響する要因について検討を行った。

【方法】2006年6月から2014年5月の期間に、当院でVCMが使用され、TDMを行った小児患者151例を対象とし、後方視的に調査・解析を行った。なお、持続透析施行中の患者および投与期間中に腎機能の低下を認めた患者は除外した。母集団薬物動態解析にはNONMEMプログラムver.VIを用いた。腎機能の指標としてのGFRはSchwartzの式より算出し、体表面積で補正したものをを用いた。

【結果・考察】対象におけるVCM初期投与量は $49.7 \pm 12.3$ mg/kg/日、初回測定時のトラフ濃度は $7.23 \pm 5.54 \mu\text{g/mL}$ であり、81.5%に相当する123例が $10 \mu\text{g/mL}$ 未満であった（ $5 \mu\text{g/mL}$ 未満：39.7%、 $5 \sim 10 \mu\text{g/mL}$ ：41.7%）。今回得られた血中濃度は、年齢・体重をもとにした、Yasuharaらの日本人小児母集団パラメータを用いた血中濃度シミュレーションにより予測される濃度よりも、有意に低値であり（ $13.9 \pm 7.01$  v.s.  $7.23 \pm 5.54 \mu\text{g/mL}$ ,  $p < 0.001$ ）、体内動態に影響するその他の要因の検索が必要と考えられた。そこで、基礎疾患、各種検査値および体重当たりの輸液量、併用薬剤について調べたところ、GFRおよび体重当たりの輸液量と血中濃度との間に有意な関連性が認められた。これらの情報を初期投与量に反映させるため、母集団薬物動態解析を行った結果についても報告する。

一般演題  
（ポスター）  
10月16日（木）